



(2) 現場共通費            甲部門    ¥ 119,400  
                                     乙部門    ¥ 73,200

4. 現場共通費の予定配賦

(1) 甲部門費の配賦基準は直接作業時間であり、当月の予定配賦率は 1 時間当たり ¥ 1,200 である。

当月の工事別直接作業時間は次の通りである。

(単位：時間)

工事番号	No.201	No.202	No.212	No.213	合計
直接作業時間	40	20	15	30	105

(2) 乙部門費の配賦基準は直接材料費法であり、当月の予定配賦率は 15% である。

(3) 現場共通費はすべて経費に属するものである。

(4) 予定配賦計算の過程で端数が生じた場合は、円未満を四捨五入すること。

※ 次ページより解説があります。

< 第3問の解説 >

問2 20x3年9月の工事原価に関する下記の<資料>により、次の問に解答しなさい。

1. 当月の完成工事原価報告書を完成しなさい。

20x3年9月の時点で竣工している工事について、単純にその工事原価を合計していきます。

ただし、経費については、現場共通費が含まれるため、先にこれを計算しておきます。

甲部門の現場共通費	=	@ ¥1,200 × 直接作業時間		
No.201 工事	@ ¥1,200 × 40 時間	=	¥48,000	
No.202 工事	@ ¥1,200 × 20 時間	=	¥24,000	
No.212 工事	@ ¥1,200 × 15 時間	=	¥18,000	
No.213 工事	@ ¥1,200 × 30 時間	=	¥36,000	合計 ¥126,000

乙部門の現場共通費	=	直接材料費 × 15%		
No.201 工事	¥30,000 × 15%	=	¥4,500	
No.202 工事	¥120,000 × 15%	=	¥18,000	
No.212 工事	¥50,000 × 15%	=	¥7,500	
No.213 工事	¥250,000 × 15%	=	¥37,500	合計 ¥67,500

資料1より、20x3年9月の時点で竣工している工事は、No.201、No.212、No.213の3件なので、これらの工事原価を合計し、完成工事原価報告書に記載します。

$$\begin{aligned}\text{材料費} &= ¥1,230,000 + ¥380,000 + ¥30,000 + ¥50,000 + ¥250,000 \\ &= ¥1,940,000\end{aligned}$$

$$\text{労務費} = ¥560,000 + ¥143,000 + ¥81,000 + ¥40,000 + ¥134,000 = ¥958,000$$

$$\begin{aligned}\text{外注費} &= ¥3,800,000 + ¥520,000 + ¥382,000 + ¥69,000 + ¥652,000 \\ &= ¥5,423,000\end{aligned}$$

$$\begin{aligned}\text{経費} &= ¥231,000 + ¥39,000 + ¥57,000 + ¥22,000 + ¥18,000 + ¥48,000 \\ &\quad + ¥18,000 + ¥36,000 + ¥4,500 + ¥7,500 + ¥37,500 \\ &= ¥518,500\end{aligned}$$

2. 当月末の未成工事支出金勘定残高を計算しなさい。

未成工事支出金勘定残高は、まだ完成していない工事にかかる原価の総合計ですので、No.202 工事のものを合計していきます。

$$\begin{aligned} & ¥ 850,000 + ¥ 235,000 + ¥ 1,380,000 + ¥ 104,000 + ¥ 120,000 + ¥ 42,000 \\ & + ¥ 127,000 + ¥ 26,000 + ¥ 24,000 + ¥ 18,000 \\ & = ¥ 2,926,000 \end{aligned}$$

3. 当月末の現場共通費配賦差異勘定残高を計算しなさい。なお、月次で発生する原価差異は、そのまま翌月に繰り越す処理をしている。また、その残高が借方差異の場合は「A」、貸方差異の場合は「B」を、解答用紙の所定の欄に記入しなさい。

まず、甲部門について見ていきます。

資料2の(2)より、月初に借方残 ¥ 13,400 があることがわかります。

そして、当月の予定配賦額は、先に計算した ¥ 126,000。

しかし資料3の(2)より、実際に発生したのは ¥ 119,400 ですから、  
 $¥ 126,000 - ¥ 119,400 = ¥ 6,600$  の有利(貸方)差異が出ています。

月初の分とあわせると、 $¥ 13,400 - ¥ 6,600 = \underline{¥ 6,800}$  の借方残となります。

次に乙部門について見ていきます。

資料2の(2)より、月初に貸方残 ¥ 8,320 があることがわかります。

そして、当月の予定配賦額は、先に計算した ¥ 67,500。

しかし資料3の(2)より、実際に発生したのは ¥ 73,200 ですから、  
 $¥ 73,200 - ¥ 67,500 = ¥ 5,700$  の不利(借方)差異が出ています。

月初の分とあわせると、 $¥ 8,320 - ¥ 5,700 = \underline{¥ 2,620}$  の貸方残となります。

甲、乙を合わせると、

借方残 ¥ 6,800 - 貸方残 ¥ 2,620 = 借方残 ¥ 4,180 となります。

**実際 > 予定** なら、余計な**費用**が発生しているということで、**不利差異**。  
**費用**のホームポジションは借方なので、**不利差異は借方差異**。

逆に **実際 < 予定** なら、あまった分の**収益**が発生しているということで、**有利差異**。  
**収益**のホームポジションは貸方なので、**有利差異は貸方差異**です。